

『麒麟がくる』と池端史観

清水 勝

大河ドラマ『麒麟がくる』が二月七日「本能寺の変」で終わった。オリジナル脚本を手掛けた池端俊策氏は、光秀が主君 信長を殺した動機や黒幕をどう描いたのか、興味を持って全四十四回を観た。

信長殺害の動機については様々な説がある。代表的なものは、①怨恨説、②義憤説、③野望説、④不安説、⑤ノイローゼ説。また、「本能寺の変」の背後には誰か黒幕がいたのではないかとの説も数多くある。①足利義昭説、②正親町天皇説、③長宗我部元親説、④本願寺説、さらには⑤秀吉説、⑥家康説もある。

今回のドラマでは、それぞれの説を上手く描いており、納得感を与えるような展開だった。また黒幕となる人物の描き方も巧みで、いずれも黒幕たらんと思わせた。

怨恨説の背景として、家康接待の料理で光秀が満座の前で罵倒され、折檻を受けた場面が印象深い。

義憤説に関しては、光秀は当初信長が麒麟を呼んでくれると考えて仕えていたものの、比叡山の残酷な焼き討ちや正親町天皇に譲位を迫る等、自らを神格化し、その横暴さが到底容認できないと思わせるシーンが出ていた。

野望説については、明智の言動にはそれを感じさせないままドラマは進んでいった。

不安説としては、足利義昭を訪ねる場面や正親町天皇との関係を秀吉が信長に密告する場面、毛利攻めでは秀吉の配下になるかのような扱いで、秀吉の重用が目立ち、光秀は自らの地位を脅かされる不安な様子が描かれていた。

光秀のノイローゼ説は、月にまで届く大きな樹木を切る不思議な夢に毎夜うなされる場面が暗示しているようであった。

さて最終回は、信長が光秀に鞆の浦にいる足利義昭を討てと命じた。それは出来ぬとの思いつから謀反を決意し、本能寺に進軍した。

攻められた信長は「十兵衛（光秀）、そなたが…、であれば是非もなし」と呻く。一方、討ち勝った光秀は雄叫びを上げるのではなく、涙する。そして静かに「世を平らかにし、麒麟を呼んでみせる」との決意を述べる。

ここでの池端史観は、信長と光秀の友情を背景に、信長様をこのようにした責任の一端は自分にあるとの思いから、信長様を亡き者にするのは自分しかないという光秀の責任感と使命感によって止む無く殺害したのだと説いているように思った。

黒幕説については、正親町天皇説を完全に否定していた。それは、光秀と信長の争いに双方が助けを求めてきたとしたらの問いに、「見守るだけだぞ」と答えている

さらに謀反後に秀吉が驚異的なスピードで中国大返しをした「秀吉神話」についても、池端氏は答えを出している。即ち、光秀の盟友であった細川藤孝からの「光秀の動きが怪しい」との書状を、備中高松城を攻めている秀吉が受け取っているシーンが出てくる。秀吉はすぐさま大返しの準備を黒田官兵衛に命じている。この書状により、手際よく毛利軍との和睦と大返しを可能にした謎が解ける。

一方、毛利軍は大返しを計画しているのに、和睦し追走もしなかった背景に、毛利元就の三男小早川隆景が秘密裏に和睦交渉をしていたとされている。この点については、足利義昭が「小早川！あんな男…。あれは毛利一族の中で真つ先に手を握った世渡り上手じゃ」と毒づくシーンがあった。

なお、家康宛の文に、自分が麒麟を呼べなくても、家康ならやってくれるであろうとの思いも託していた。

最終シーンは光秀が命を落とさずに生き続けているとの暗示が示され、完結。

ここにも池端流の気遣いが出ているように思った。というのは、徳川家康の側近として、江戸幕府の初期の幕政に深く関与した僧・天海が明智光秀という説があり、そこへの配慮かもしれない。

『麒麟がくる』の面白さは、批判もあるようだが歴史上に存在しない架空の人物を登場させ、重要人物との関係をつなぐ役割を与えている点だ。京の医師 望月東庵（堺正章）、東庵の助手 駒（門脇 麦）、二河の農民で忍び菊丸（岡村隆史）、旅芸人一座の女座長 伊呂波太夫（尾野真千子）の活躍がこのドラマを上手く回しているように感じた。

何はともあれ、光秀（長谷川博己）と信長（染谷将太）のラストシーンは印象に残った。

内容的にも、全ての登場人物の演技力、そしてコロナ禍の中断をものともしない演出の巧みさに拍手である。